

平成29年度第2回
東京都現代美術館美術資料収蔵委員会
コレクション部会 議事録要旨

平成30年1月31日（水）

午前10時00分開会

富岡文化施設担当課長：それでは、早速ですけれども、皆様おそろいですので、始めさせていただきます。

改めまして、本日は皆様大変お忙しい中、御出席いただきまして、どうもありがとうございます。

ただいまから「平成29年度第2回東京都現代美術館美術資料収蔵委員会コレクション部会」を開催いたします。

私は、東京都生活文化局文化振興部の文化施設担当課長の富岡でございます。議事に入りますまで司会を務めさせていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

まず初めに、東京都生活文化局文化施設改革担当部長の鈴木から御挨拶を申し上げます。

鈴木文化施設改革担当部長：おはようございます。文化振興部の鈴木でございます。

本日は大変お寒い中御出席をいただきまして、まことにありがとうございます。

昨年7月の第1回のこの収蔵委員会で御審議いただきましたいろいろなコレクションにつきましても、もう既におかげさまで、全て受け入れ手続が終わっているところでございます。改めて御礼申し上げたいと思います。

本日、第2回の収蔵委員会では、購入の案件が25件、寄贈が58件についてお諮りしたいと思います。東京都現代美術館が収集するコレクションとして適切なものかどうか、本日、皆様方の専門的知見から御審議いただければと思っております。

御案内のとおり、東京都現代美術館、28年の5月末より休館に入っております。もうかれこれ2年ほどたっているところでございますが、この休館中におきましても、このように引き続きコレクションの充実に努めてまいりたいと考えているところでございます。現代美術館、来年度リニューアルオープンを目指して、現代美術館、東京都と一緒に頑張って取り組んでまいりたいと思いますので、引き続き、皆様方の御支援を頂戴できればと思っております。

本日はどうぞよろしくお願いいたします。

富岡文化施設担当課長：続きまして、本日御出席いただきました委員の皆様を御紹介させていただきます。

私の向かって左側から紹介をさせていただきます。

逢坂恵理子委員でございます。

島敦彦委員でございます。

水沢勉委員でございます。

清水真砂委員でございます。

堀元彰委員でございます。

よろしくお願いいたします。

なお、本日、内田洋子委員は御欠席となっております。

続きまして、事務局の職員を御紹介いたします。

東京都現代美術館副館長の馬神でございます。

同じく現代美術館事業推進課長の加藤でございます。

同じく現代美術館事業係長の牟田でございます。

どうぞよろしく願いいたします。

続きまして、お手元の資料の御確認をお願いいたします。

まず、一番上に会議次第がございまして、次に資料1から5までと評価表がございまして、

資料1、東京都現代美術館美術資料収集方針、A4サイズでございます。

資料2、今回の収集候補作品一覧表でございます。

資料3、A4サイズでつづっております作家・作品説明書でございます。

資料4、本収蔵委員会の設置要綱がございまして、

資料5、コレクション部会の委員名簿がございまして、

最後に、A3サイズでコレクション部会評価表が2枚ございまして、1枚は購入分、片面印刷になっているものがございまして、もう一枚、A3サイズで寄贈分の評価表、こちらは両面刷りとなっております。

皆様おそろいでしょうか。大丈夫でしょうか。

本日、配付しました資料につきましては、委員会終了後に回収をさせていただきますので、御了承ください。

議事に入ります前に、まず、委員長を選任をお願いいたします。

当部会の委員長につきましては委員の方々の互選で定めることになっておりますが、いかがいたしましょうか。

逢坂委員：水沢委員にお願いしたいと思います。

富岡文化施設担当課長：皆様、いかがでしょうか。

（「異議なし」と声あり）

富岡文化施設担当課長：それでは、水沢委員に委員長をお願いいたしますので、よろしくをお願いいたします。

委員長に進行をお願いします前に、当部会の公開について説明をさせていただきます。

当部会ですが、東京都現代美術館美術資料収蔵委員会設置要綱第11の規定によりまして原則公開となっております。しかし、資料収集決定前の審議の段階で対象資料の詳細を公開することによりまして、現在の作品資料所有者の方に不利益を生じさせるおそれがあるということ、また、資料の現物確認につきましては、所有者の方から説明の参考用に借用しているということから、事務局といたしましては、委員会当日の段階では議事内容は非公開とすることが適切と考えてございます。

なお、議事内容につきましては、資料収集決定の後に議事録の公開を予定しております。公開に当たりましては、委員の皆様、個人情報など公開に差しさわりのない内容がないか、追って確認をさせていただきたいと思っております。

非公開とするためには、同要綱第11の第1項（2）及び第2項（2）の規定によりまし

て部会での決定が必要となります。このことにつきまして、事務局としましては委員の皆様にお諮りいただければと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、委員長、進行をどうぞよろしくお願いいたします。

水沢委員長：ありがとうございました。

今、お話のあったことから確認しないといけませんね。まず、コレクション部会の公開の是非についてお諮りしたいと思います。事務局から本部会については非公開が適当という御意見がありましたけれども、いかがですか。問題ありませんね。

(「異議なし」と声あり)

水沢委員長：ありがとうございます。それでは、事務局の意見に対して異議がないということですので、非公開ということにいたしましょう。

それでは、本部会は非公開として、後日議事録を公開させていただくことにさせていただきます。

それでは、早速、議事に入りたいと思います。

まず、事務局から、収集候補作品の説明をよろしくお願いいたします。

馬神副館長：それでは、候補作品について御説明いたします。

本日お諮りする作品ですが、購入が25件、寄贈が58件となっております。詳細は、事業推進課長の加藤より御説明申し上げます。

加藤事業推進課長：それでは、御説明させていただきます。

まず、御説明に当たりまして、東京都現代美術館美術資料収集方針につきまして、資料1を御参照ください。

この資料収集方針は、まず「1 方針策定の趣旨」といたしまして、21世紀の美術文化を担う東京都現代美術館の美術資料の収集に当たりまして、その方針を定め、首都東京、国際都市東京の美術館にふさわしい美術資料の収集を図り、常設展示の一層の充実を目指すものでございます。

「2 収集の基本的な考え方」といたしまして、次の5点がございます。

まずは、首都東京の視点から、東京都現代美術館の常設展示が、我が国の文化的自己表現となるように、日本の美術のすぐれた作品を収集する。

2番目といたしまして、この日本の美術のみならず、欧米、そして、アジア、世界の各国の作品も収集するというものでございます。

3番目は、美術表現の多様化に対応するための幅広い分野での収集を行います。

4番目といたしまして、現代の美術がどのような変遷をたどって生まれてきたかということを知る上で必要な近代の作品を収集いたします。

5番目は、収集は、次項の方針に基づき、計画的に行うとなっております。この次項の方針というのが、「3 収集方針」でございます。

そして、この(1)が、日本の現代美術、そして、欧米、アジア等の作品ということ、イといたしまして、日本及び海外の近代の作品、(2)収集分野が、アからクまでのある

意味幅広い対象を考えているというものでございます。

この「2 収集の基本的考え方」に基づきます「3 収集方針」の(1)(2)につきましては、資料3の「該当する規定」という項目で、このどれに当てはまるかというものを示しているものになります。

続きまして、それぞれの作品につきまして、御説明をさせていただきたいと思っております。

この説明に当たりまして、まず資料3の作家・作品説明書というものをお手元にお配りさせていただいておりますが、これと資料2の収集候補作家一覧表をあわせてごらんいただければと思っております。

ただ、今回、寄贈その他、点数も多く、また、購入、寄贈両方に渡っております作家もございまして、資料3の作家・作品説明書、写真入りの資料につきましては、こちらの一覧の順番とは少し入れ違っております。同じ作家で購入と寄贈があります場合には続けて束ねてございまして、説明につきましても、まずは両方対象となっております作家につきましては、購入、寄贈という形で御説明をさせていただきますので、この資料3の順番を基準とさせていただきます。

まず購入の1番、ソピアップ・ピッチの作品になります。これは購入の対象3点となります。1、2、3ということで、まず1番が《樹木園》という作品、そして、2番が《苔の筋》、3番が《月長石》という立体になります。

ソピアップ・ピッチは、1971年、カンボジアに生まれた作家でございまして、家族とともに一旦は難民キャンプに逃れておりましたが、1984年にアメリカに渡り、アメリカで美術教育を受けております。2002年末には、カンボジアに戻り、現在もカンボジアで活動を続けております。

この購入の1番と2番は「レリーフ・シリーズ」という2012年から始められたシリーズのうち2点になります。この作家は一旦絵画から離れまして、立体などを制作していたのですが、さらに再び絵画に向かい合った時期の作品になります。

その素材は、竹ですとか藤のつるなどを使ってございまして、ほとんどの素材にカンボジアのものを使うということで制作を続けている作家でございまして、ローカリティーと近代的な抽象性との結びつきを示す作家といたしまして、近年、評価が高い作家になっております。

2番の《苔の筋》も同様のシリーズの作品でございまして。

3番の《月長石》、こちらは立体の作品になります。これは2017年に、ラウシェンバーグ財団でのレジデンスの際に、その庭といいますか、敷地の中だとは思いますが、そこにけもの道があったことから、それに着想を得たと言われているものでございまして。

この3点の作品につきまして、これまで現代美術館では、アジアの作家につきましてもコレクションをしております。それをさらに加え、層の厚いものにしていくものであると同時に、こうしたソピアップの作品は、当館の所蔵する制作された地域を超えた絵画、彫刻に対しても、多角的な視点を投げかけるものとして、積極的な収集を考えたいと思っております。

おります。

4番、こちらが購入が4点、加藤泉の作品になります。4点とも全て《無題》という作品になりますが、こちらは加藤泉のソフトビニールの立体作品になります。このソフトビニールの作品につきましては、着色をされておりまして、ある種、型を使って、形の基本的なところがつくられていくものでございます。それは版画に通じるものとして作家は捉えてはいるものではございますが、一点一点の着色ですとか、その形に全てそれぞれに手を加えておりまして、エディションがあるというものよりも一点物の作品として制作されているものでございます。

加藤泉の作品につきましては、絵画作品を1点既に収集しております。つきましては、この絵画作品とともに、こうした立体をあわせて展示することで、より常設展示を充実させるとともに、立体と絵画を補完的に置きつつ制作を進める作家のエッセンスを伝えるものであることや、日本独自のサブカルチャーやキャラクター産業に言及する文化的な重要性もこの作品に認められると考えております。

つきましては、この作品4点を、購入の候補とさせていただきたいと考えております。

8番以降が、購入が16点、寄贈が2点、末永史尚によります一連の作品ということになります。

一群の作品の中で、まず一つは《Tangram-Painting》のシリーズがございます。これが購入の8番から15番となっております。こちらは作品名のとおり、正方形を7片に切り分けてできる三角形と四角形を使って造形する「タングラムパズル」のパターンを絵画に応用したシリーズになっております。ですので、写真では、一つの形としてこちらに掲載はさせていただいておりますが、展示に際しては、さまざまな形で組み合わせて、展示をしていくことが可能な作品でございます。

購入、16番になります。《Search Results》という作品名でございまして、こちらはインターネット上の画像検索ページで画家の名前を検索しまして、画面に作品画像が並んでいる状態をそのまま描いているものとなっております。本作は、バーネット・ニューマンを検索した際の48画像を描いております。

17番、《折り紙モール》という作品です。折り紙を短冊上に切り分け、輪をつくり、交互につなげる飾りモールをモチーフにしております。こちらも天井、壁、床の3点を用いて三角形を形づくるほか、会場の形、展示の形に合わせまして、さまざまな組み合わせで展示が可能な作品となっております。

そして、購入の18番《水平器》という作品でございます。こちらはまさに身近な水平器の形をそのままに、絵画として立体制作しているものなのですが、こうした身近なものや日常目にする物質をモチーフに、それと同寸法の立体パネルを整形し、その表面に描いていくシリーズのうちの一つとなっております。

購入の19番から23番、こちらが《絵画》という作品でございます。これは通常は「裏」であるカンヴァスの後ろ側を描いているものでございまして、これはなかなか言葉で御説

明するよりも、実際の作品をごらんいただいたほうがおわかりいただきやすいと思います。が、通常の表側は極端に抽象化されたモノクロームの色面が塗られておりまして、カンヴァスと同サイズに仕立てたパネルの全面に描いた立体的な絵画とも言える作品になっております。

次が、寄贈作品となります。寄贈の1番、2番、この2点が、末永史尚の寄贈作品になります。寄贈の1番、2番ともに《ふせん》という作品でございます。こちらは、購入作品の18番《水平器》と同じく、身近なものや日常目にする物質をモチーフにした作品となっているものでございます。

末永史尚のこの一群の作品につきましては、購入、寄贈合わせて18点の作品を今回収集の候補としてございます。これは、当館の常設展示室の空間を、ある程度空間そのものを構成できる量の作品が必要ではないかと考えました上で、これを一つずつの作品であると同時に全体としてインスタレーションできる作品を収集したいと考えているものでございます。

この末永の作品につきましては、立体的で組み替え可能な絵画、展示空間や美術作品をモチーフにしたものなど、作品が置かれる空間自体にも鑑賞者の意識を向かわせるものという、この作品の持つ意味も含めまして、この点数を今回の収集の対象として考えているものでございます。

次の作家にまいります。購入の24番になります。こちらは五月女哲平の作品、購入が2点、寄贈が1点となります。

購入の1点目《He, She, You and Me》という作品でございます。

五月女哲平は、1980年、栃木県の生まれの作家でございまして、近年、具体的なモチーフを抽象的な色面構成に変換する作品を発表し、注目を集めている作家でございます。

この購入24番は、「VOCA展2012」で最初に発表されたものでございまして、こちらも後ほど実物をごらんいただきますと、モノクロームの画面に一見見えるのですが、その下には多様な色彩が塗られておりまして、その上からモノクロームの色がかけられております。よく画面をごらんいただきますと、そのモノクロームの色と色の間にその下の色彩が少し見えてきておりまして、まさに、非常に絵画を見ることの楽しさや絵画の豊かさというものを感ぜさせる作品になっております。

購入の25番も五月女哲平の《White, Black, Colors》という作品になっております。

もう一点が、寄贈の3番《Pair》という作品でございます。本作品は、購入作品の2012年のやや前に当たる作品でございまして、2009年から始まる後ろ向きにも正面向きにも、男性にも女性にも見えるような人物像を抽象化した「He and she」シリーズのバリエーションの一枚となっております。この作品が購入24番となります。五月女哲平のモノクロームの作品につながるものでもございます。つきましては、この3点をあわせて収集の候補とさせていただきます。2010年代の日本の絵画の一つの達成地点として収集にふさわしいのではないかと考えております。

次が、全て寄贈のみの作品となっております。寄贈の4番、こちらは中野淳という作家の作品になります。寄贈4、5、6と、3件のお申し出を受けております。

この作家は1925年、東京両国に生まれた作家でございます。この作家は、現在はもう既に亡くなられてはいるのですが、もともとは両国に生まれ、そこで生まれ育った作家としまして、1975年から78年にかけて木場という場所が変わっていくさまを記録に残そうと、「木場シリーズ」という作品を集中的に制作しております。水門や工場のある江東の風景を描いた作家でございます。

4番が《滅びゆく風景（木場）》、5番が《青い水門》という作品でございます。

寄贈の6番は、そうした絵画の制作のもとになりました一群のスケッチでございます。

こうした作品につきましては、現代美術館では休館の間「MOTサテライト」展という地域に根差しました展覧会をこれまで2回開催をしてきております。そうした地域とのかかわり、地域の記憶を残すという点におきまして、こうした中野さんの作品も収集の候補と考えておりますとともに、ほかの既に収蔵しております作品とあわせて展示することで、広く東京の風景の移り変わりをたどることができる、そうした記録的な一面も持つ作品として、今回、収集の候補とさせていただきたいと考えております。

寄贈の7番、これは朝倉摂の舞台「メテオール」のポスターになります。二次資料として収集を考えているものでございます。

朝倉摂の資料につきましては、前回までにまとまった形で関連資料を含めて御寄贈を受けております。これはそれを補うものとしまして、既に舞台「メテオール」の舞台美術につきましの資料が収集されておりますのに加えまして、今回、ポスターがお手元にあったことがわかり、それをあわせて収集をしたいと考えているものでございます。

寄贈の8番から16番まで、こちらがオノサト・トシノブの作品でございます。これまでオノサト・トシノブの作品につきましては、継続的に御寄贈を受けております。これも今回、今年度御寄贈のお申し出を受けているものでございます。

今回は、特に寄贈の8番《二つのかぼちゃ》のように、オノサトの中でも初期の作品が含まれております。

そして、次の9番、こちらも1950年代のいわゆる「ベタ丸」シリーズの以前の作品、その「ベタ丸」シリーズへと連なる幾何学的なアプローチというものがうかがえる作品となっております。

寄贈の10番につきましても、同じ1950年代の作品でございます。

そして、寄贈の11番は1963年、12番も60年代の作品になります。

13番からが水彩・素描の作品となっております。そして、13、14、15、16と、水彩作品をあわせて、今回御寄贈のお申し出を受けているものでございます。1940年代から60年代に至るまでの作品群となっております。まさにオノサトの作品につきましては、既収蔵作品を加えまして、今回124点という作品になっておりまして、ほぼこの作家の初期から晩年に至るまでの油彩、水彩、版画を網羅するようなコレクションとして、現在、形成されつ

つあるものでございます。

次の作家になります。寄贈の17番から58番、中原實の一群の作品、42点の御寄贈になります。

中原實は、1893年、東京に生まれておりました、日本歯科大学の学長を務め、もともとお父様の代からのそうした歯科医である家系に生まれております。戦前、アメリカからヨーロッパに留学をしておりました、もちろん歯科医としての留学ではございましたが、そこで当時のさまざまな芸術に触れたことから、画家としての歩みも、帰国後、始めた作家になっております。

この中原の作品につきましては、以前より御寄託という形で、長年現代美術館で保管をさせていただいておりましたが、このたび、全て美術館に寄贈のお申し出を受けまして、今回候補とさせていただいているものでございます。

個別の作品名や制作年につきましては、次ページより別紙でお示ししております。

この作品は、1923年、中原が帰国してまず最初に二科展に出品をいたしました《モジリアニの美しき家婦》という最初期の作品から、《ヴィナスの誕生》《海水浴》といった20年代の作品、そして、1925年の《乾坤》という代表作も生まれております。

さらに、1927年以降は第一美術協会に所属しておりますが、その時期の作品群、20年代末から30年代にかけての一群の作品がございまして、さらに戦争前からはございまして、戦後は二科展を主な活動の場にしておりますが、その戦後間もない時期の1947年の《杉の子》という作品から、最晩年の作品になります《揖斐川石》、1961年の作品まで。

さらに、今回、これはこの御寄贈、収集の候補にするに当たりまして少し調べてみたのですが、これまでほとんど発表されてきていなかった、作品名が不詳の作品が1点含まれておりました、今後、こうした作品を含めまして、中原につきましてはの調査研究を美術館でも進めていきたいと考えている作品群になります。

以上、収集の購入及び寄贈作品の御説明となります。

水沢委員長：ありがとうございます。

かなり多岐にわたっていますけれども、何か委員の方、御質問はありますか。いいですか。

清水委員：大丈夫です。拝見したいと思います。

水沢委員長：わかりました。

五月女さんは「SOUTOME」とローマナイズされていますけれども、サオトメとどちらが正しいの。

加藤事業推進課長：ソウトメという読みです。画家でいらしたおじい様を調べましても、ソウトメと登録されていたので、間違いはないです。御本人にも聞いております。

水沢委員長：わかりました。ありがとうございます。

では、作品を拝見しましょう。実見に移りたいと思います。

皆さんを作品のそばに御案内ください。

(委員離席)

(作品検分)

(委員着席)

水沢委員長：ありがとうございました。

時間が、あともう40分弱になりました。作品を見ての質問をまず受けましょう。どなたか、確認しておきたいことはございますか。

堀委員、どうぞ。

堀委員：中野淳さんの作品が、江戸東京博物館にも所蔵されていると資料に書いてありますが、江戸東京博物館はどういうものをお持ちなのですか。

担当学芸員：江戸博に収蔵されておりますのは、東京の風景を描いたシリーズの中の一点でございます、作家に委託をして制作されたものと聞いております。

堀委員：わかりました。

水沢委員長：ほかにはどうでしょうか。

島委員、どうぞ。

島委員：アジアの関連の作家は、これまでスッ・ドーホーなどもありましたか。作家の数で言うとどれくらいありましたか。

加藤事業推進課長：作家の数で言いますと、10人、20人ぐらい。まだ体系的な収集には至っておりません。その点で言いますと、今後アジア圏を対象にある程度作家をあらかじめ整理をしながら、体系的に収集していくことができないかというように考えてはおりますけれども、購入できる作品が、このソピアップ・ピッチについては、今回のこの機会を逃すのは少し今後に響くのかなということでは入れております。基本的にはそのように考えておまして、まだ20人あるかないかぐらいではございます。

ただ、特に東南アジアの作家もほかにも少し収集は既にされています。

島委員：展覧会もされていますしね。

加藤事業推進課長：やっております。

島委員：わかりました。

水沢委員長：アジアは、どの範囲をアジアと呼んでいるのですか。

加藤事業推進課長：東アジア圏だけではなくて、現状では東南アジアも含めて視野に入れているところでございます。あとは、環太平洋的に言えば、オーストラリアが入るのかどうかということについては、まだオーストラリアまでは基本的には考えていないところです。

水沢委員長：インドも今は入っていない。

加藤事業推進課長：今のところはまだ入っていませんが、今後、まずは体系づけて考えていく基本資料を制作していく上で、そこは少し検討はしていきたいと思っています。

水沢委員長：そのときに、地域だけではなく時間もさかのぼるというのはあり得るのですか。

加藤事業推進課長：どこまでさかのぼれるかというのも、実際の作品の保存状況とか、一定の調査をした上でということにはなると思うのですけれども、限定するということは余り考えていませんが、ほかの作品の、まず、展示で有効に使えるかどうかというところから言うと、割と新しい作品から先に収集して、そのところでどうさかのぼっていくのかということにはなると思います。

水沢委員長：わかりました。

ほかには何かありますか。逢坂委員、ありますか。

逢坂委員：特にありません。

水沢委員長：清水委員、ありますか。

清水委員：会場で質問点はお聞きいたしました。

水沢委員長：では、特に質問はないようですけれども、そうすると、今度は評価方法の話になりますね。その御説明をお願いできますか。

富岡文化施設担当課長：それでは、評価方法を説明させていただきます。お手元にA3の紙を2枚お配りしてございます。こちらに今回の収集候補作品を一覧で記載しております。作品ごとにA、B、Cの3段階で評価をお願いしたいと思います。Aは「収蔵すべきである」、Bは「収蔵してよい」、Cは「再検討を要する」という3段階になってございます。こちら、いずれかにマルをつけていただきたいと思います。最後に署名欄にも御署名をお願いしたいと思います。1枚は片面でもう一枚は両面で裏に署名欄がございますので、両方をお願いしたいと思います。ペンで記入をお願いしたいと思います。

記入していただいた後に評価表を回収させていただいて、少々お時間をいただいて事務局で確認をいたします。A、Bの評価については個別の発表はいたしませんので、Cがなかった場合はそのまま審議は終了になります。もしCがついたものがあつた場合には、C評価をつけた委員の方に理由をお伺いしまして、その上で、改めて皆様に作品について評価をしていただくということでいきたいと思ひます。

最終的には、収蔵委員会設置要綱の第10条によりまして、多数決での決定ということになります。

説明は以上でございます。

水沢委員長：ありがとうございます。

何か質問はありますか。よろしいですね。

それでは、記入していただいて、最後に署名も忘れないようお願いいたします。

(委員評価書記入)

(事務局評価書確認)

水沢委員長：ありがとうございます。今、結果の報告がありました。発表いたします。

C評価はありません。これで御審議いただいた収集候補作品については、本委員会として承認するということになりましたけれども、よろしいでしょうか。

(「異議なし」と声あり)

水沢委員長：ありがとうございました。

異議はなしということで、これで賛同を得ましたので、審議は終了ということになります。皆さん、ありがとうございました。

きょうはすごく順調で、でも、何かたくさん見た感じがするのですけれども。皆さん、ありがとうございました。

恒例ですので、最後に全体的な意見、個別は済んだということで、総評的なことを一言ずつぐるりといただいて、最後に私もコメントいたします。

逢坂委員から、お願いします。

逢坂委員：こちらの美術館の方針でもあると思うのですけれども、一人の作家の作品を多方面から捉えることができるように、1点、2点ではなくて、複数収集するという姿勢は、美術館の収蔵作品を充実させるために大変重要なことだと思うのです。どこの美術館も、これだけの複数の作品をまとめて一度に収蔵できる条件が整っているわけではないので、東京都現代美術館の姿勢を非常に高く評価したいと思います。

今回も複数を見せていただいたので、やはり鑑賞者にとっても一人の作家の作品を理解する上でも非常にいいセレクションになっているのかなと思います。

これはもう水沢委員長に預けたほうがいいかもしれませんけれども、特に中原實さんの作品をこれだけ収蔵できるというのは、今後、東京都現代美術館の大きな財産になっていくかと思います。

そして、また、オノサト・トシノブの作品がこれだけたくさんあるということで、近い将来、まとまった展示をなさることを期待しております。

若手作家に関しては、いろいろな議論があるところだと思うのですけれども、積極的にプライマリーなプライスで複数買っていく姿勢をまた改めて評価したいと思います。

水沢委員長：ありがとうございます。

島委員、お願いします。

島委員：今回、ソピアップ・ピッチさんのように、新しい空気を感じさせる作品が、前回のマンダースもそうでしたけれども、とても新鮮な、美術館のコレクションが更新されていく感じがあったので、これは非常にいいのではないかと思います。

それから、既に収蔵しているものを補完していくというのも、これまでどおり継続されたいかなというのと、若手の作家がここ1～2回、意識的に70年代生まれあたりの作家が入っていくというのはとてもいいのではないかと思います。

中原さんについては、後ほど水沢委員長からお話いただくことにしまして、個人的な思い出だけ。中野淳先生です。中野淳さんは、このリストの中に富山県美術館と書いてあるのですが、国内、公立美術館の油彩画というのは、実はこの作品は私が富山の美術館にいたころに、なりたての学芸員で、まだ25～26ですけれども、「富山を描く－100人100景」という置県100年事業があって、50人の日本画家、50人の洋画家に絵を依頼して、それで中野先生に描いていただいたのです。そのときに、一緒に富山の市内を車で取材に回ったり

して、中野さんは非常に実直な油絵の方なのですけれども、こういう形でここに所蔵されるのは、本当に。

そのときは、お会いしたときに、松本峻介の思い出を語る語られて、全て忘れてしまいましたけれども。

水沢委員長：本を読めば。

島委員：本を読んでいただければ、また改めてね。

本当に長生きされたので、亡くなられたのは残念ですけれども、非常に興味深いコレクションの一つになるのではないかと思います。

ありがとうございました。

水沢委員長：ありがとうございます。

清水委員、お願いします。

清水委員：今までおっしゃったことと少し重なるかもしれませんが、アジアの作家にも目を向けていくということはいいい姿勢だと思うのです。これからも機会を捉えて、無理のない範囲でアジアの作家にも手を伸ばしていけばよいのではないかと思います。

あとは、まとまったコレクションをお持ちになる。オノサト・トシノブは、ずっと引き続き収集していらっしやいましたけれども、今回もこの中原實さんの作品がまとまって入りまして、一人の作家をここに来ればある程度全貌がわかるということは、とてもすばらしいと思うのです。

そのたくさんまとまった作品についての調査というのを、日々の活動の中で続けてというのはなかなか大変なことではないかと思うのです。ただ、ここにそれだけまとめて持つということは、それだけの責任も出てまいりますので、そこを続けてどうか頑張っていていただきたいと思っています。

水沢委員長：ありがとうございます。

堀委員、お願いします。

堀委員：私も皆さんがおっしゃったことと重なる部分もあるかと思うのですけれども、これまで、購入されている加藤泉とか、オノサト・トシノブなどを補完するという収集もあれば、他方で、これまでつながりのあった作家の方から新たに寄贈を受けたり、若い作家やアジアの作家の作品を新規に購入することも行われていて、本当に盛りだくさんというか、全方位的な収集ということで、限られた予算と限られたスタッフの人数、時間という中では結構ご苦労もあったと思うのですが、大変すばらしい収集だと思います。

水沢委員長：ありがとうございました。

大変充実して展開しているなと思います。気になるのは、収蔵空間ですけれども、それが展示に活用していくという姿勢で、言ってみれば、展示が収蔵機能もしてくれると考えていく必要もきっとあるでしょうね。

まとまった作品がこれだけコレクションに入ってきているというのは、この美術館の性格を、また、すごく規定していただろうと思います。今後の学芸員の仕事もすごく規定す

る部分を持つと思います。

今までの都美術館時代から、朝日晃さんが頑張って調べてきた大正アバンギャルドのコアな部分があって、その一つがこういう形でようやく公的なコレクションにプライベートから移ったというのは、実はすごく画期的だと私は思います。

そのときに、都美術館時代の作品だけではなくて図書資料も集めてくる、関係資料もアーカイブしていくという姿勢が、図書のほうも重要なコレクションになっている。恐らく中原實もそういう要素を持っている人ですね。その情報を正確に集めておいて、それが補完されると、さらにセンター的な意味合いが持てるようなまとまったコープスとしての資料体になるというように期待しております。

恐らく10年、20年とかかるような調査研究が必要であろうと思いますが、その覚悟で臨んでいけば、都美術館でつくった何かが現代美術館へと、もっとより有機的に結びつくということになると思いますので、期待していますので頑張ってください。ありがとうございました。

皆さん、ありがとうございました。

富岡文化施設担当課長：水沢委員長、どうもありがとうございました。

最後になりますけれども、清水委員が、本日の委員会をもって任期満了ということになります。通算4期8年にわたりまして御指導、御助言をいただきました。この場をおかりしまして、御礼申し上げたいと思います。本当にどうもありがとうございました。

清水委員：お世話になりました。ありがとうございました。

水沢委員長：何か一言。

富岡文化施設担当課長：何か最後に厳しい一言でも、ございましたら。

清水委員：よくわからない分野もありつつ、皆さんの御協力を得ながら委員を務めさせていただきまして、本当にありがとうございました。

また、委員とは違う立場で、いろいろとお世話になるとと思いますので、今後ともよろしくお願いいたします。

ありがとうございました。

水沢委員長：御苦労さまでした。ありがとうございました。（拍手）

富岡文化施設担当課長：引き続き、東京都及び東京都現代美術館に御指導をいただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、これもちまして「平成29年度第2回東京都現代美術館美術資料収蔵委員会コレクション部会」を終了いたします。

資料は机の上に置いておいていただければと思います。

どうもありがとうございました。

午前11時42分閉会

以上